

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2019年 9月 20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程・三回生

氏 名 宋 宇航

助成の種類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第20回明史国際学術研究会		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	李賢的政治活動與正統至天順時期内閣閣臣參與選官之变革		
開催場所	中国安徽省鳳陽県 鳳陽国際ホテル		
渡航期間	2019年 8月 17日 ～ 2019年 8月 25日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃および日本国内の移動費：	96,000円
		中国での交通費および宿泊費：	38,000円
滞在費：		16,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要／宋宇航

文学研究科歴史文化学専攻
博士後期課程・三回生
宋宇航

2019年8月19日から8月23日にかけて、中国安徽省鳳陽県で第20回明史国際学術研討会暨朱元璋與明中都国際学術研討会（The 20th International Symposium on Ming History and the International symposium on Zhu Yuanzhang and Ming Zhongdu 以下、「明史国際シンポジウム」と略す）が開催された。明史国際シンポジウムは中国明史学会・鳳陽県人民政府・安徽科技学院の主催による、中国最大の明代史研究の国際学会である。今回のシンポジウムは、今年が明太祖朱元璋の中都（現在の鳳陽県内）造営650周年にあたるため、明中都を記念しその研究を推進する趣旨も含まれている。参加した研究者は140人を数え、中国国内だけではなく、日本・フランス・韓国・アメリカ等の国々からの参加者も集まり盛会であった。また、シンポジウムの会場には記者も多く列席し、広報に努めていた。明史国際シンポジウムは世界規模で明代史研究の成果を発信する場となっている。

8月20日の全体大会の報告の後、参加者全員は研究テーマによって「政治と軍事」「民族・中外関係およびそのほか」「経済と社会」などの分科会に分かれ個別報告が始まった。私は「政治と軍事」グループに配置され、8月21日の午前中に会議論文を口頭発表した。題目は「李賢的政治活動與正統至天順時期内閣閣臣参与選官之変革」（日本語：「李賢の政治活動と正統期から天順期までの内閣閣臣の官員選任参与の変容」）である。

報告要旨は以下の通り。会議論文では、天順（1457－1464）期の内閣閣臣の李賢（1409－1467）と、宣徳（1426－1435）・正統（1436－1449）期に「三楊」と称された閣臣の楊士奇（1365－1444）・楊榮（1371－1440）・楊溥（1372－1446）の官員人事への参与方式を比較考察した。三楊は専ら薦挙（皇帝への推薦による官員の任命・昇進）を通じて官員の選任に関与したが、私情にもとづく人事が蔓延し弊害が多く表面化してきた。三楊の政界引退後、特に景泰（1350－1456）期以降は、吏部はしだいに人事権の回収に成功したが、独自の人事権行使は絶えず非難を招き、吏部の官員が弾劾に遭うこともしばしばであった。李賢が入閣した以降は三楊の国政主導期に比べ、新しい政治関与の方式を模索・実践しなければならなかった。要するに、内閣による官員人事参与の方式は異なっていたのである。そのために、筆者は李賢の著作『古穰文集』や国家編纂の『明宣宗実録』『明英宗実録』『明憲宗実録』を中心に、同時代の官員たちの文集・筆記（例えば、楊士奇『東里文集』・陳循『芳洲文集』・尹直『審齋瑣綴録』など）も参考にし、人事関与方式の差異から内閣政治の変化の原因、明朝政治制度への影響まで考察した。

会議論文は参加者の多くから賛同を得た。特に、李賢ら閣臣の言動や事件にもとづく具体的な考察は、明朝政治制度の概説に止まらない、内閣の人事権についての精緻な分析だという評価を与えられた。私の報告のほかにも、分科会では明代内閣政治に関する発表も何件かあった。これらの優れた研究成果は参照価値に富み、現在の博士論文の執筆にも貢献するところ大であった。分科会の報告はほかにも、政治制度・軍事・礼制・党争・明太祖朱元璋など多くの課題を数えた。全体大会の発表と併せて、筆者はここから多くを学び、自己の研究の視野を拡大することで、新たな課題を見つけることもできた。

なお、明史国際シンポジウムは研究報告のほかにも、史跡・博物館の現地調査・見学も含まれていた。全体大会・分科会の終了後、シンポジウムの参加者は明中都国家遺跡公園・明皇陵・鳳陽県博物館等へ連れられ、現地調査の機会を得た。これは明代の歴史と文化の理解を一層深めるものとなった。明中都国家遺跡公園は明王朝の都城に相当し、現存する城壁・城門・道路からは、明代の中都の広大な規模を実見することができた。また、中都の建築プランはその後の南京城・北京城の造営に強い影響を与えたものである。将来もしチャンスがあれば、再び明中都の所在する鳳陽県や周辺地域の史跡調査をおこないたいと思う。

筆者にとって明史国際シンポジウムは、明代史の研究者の多くと知り合い交流する機会でもあった。こうした交流の成果は専門知識や研究方法の吸収だけに止まるものではない。筆者は長期間日本に留学しているため、中国国内の学界についての知識は却って乏しい。今回の交流を通して中国国内の明代史研究の動向、各大学・研究者についての認識をさらに深めることができた。これは自身の今後の研究に大いに役立つものである。一方、私は中国人研究者たちに日本の明代史研究の成果と動向を紹介することで、日中間の学術交流を促進することができた。

【謝辞】

最後になりましたが、京都大学教育研究振興財団から助成金をいただいたことで、明史国際シンポジウムに参加し、発表や交流の貴重な機会を得ることができました。貴財団に心より感謝と敬意を表します。貴財団の今後のさらなる発展と助成事業のさらなる成功を祈願しております。